



「2026年ゴルフ新年会」の参加者に聞く

—— 昨年の総括と今後の展望

前号（12頁）では、1月29日に開催された『2026年ゴルフ新年会』の概要について取り上げたが、本号では出席した4コースのゴルフ場経営者から昨年の総括及び、今後の展望や課題についてコメントをいただいたので紹介したい。

セブンハンドレッドクラブ

まず、セブンハンドレッドC（栃木県、18H）の小林忠広社長に話を聞いた。小林社長はゴルフ場の他、ゴルフ会員権大手の『住地ゴルフ』、ゴルフ場の隣にある『お丸山ホテル』の社長を兼任している他、公益社団法人日本パブリックゴルフ協会では監事も務めている33歳だ。



セブンハンドレッドCの小林忠広社長

「2025年度は、ゴルフ業界全体の地力が改めて問われた一年だったと感じます。コロナ禍による特需が落ち着き、来場者数や消費動向が平準化する中で、各ゴルフ場のブランド力、サービス力、そして地域との関係性がはつきりと表れ始めています。まさにここからが、本当の意味での業界の未来を左右する局面だと感じています。そのような節目の年に、当クラブは開場45周年、住地ゴルフは創業55周年を迎え、さらに『JGTO住地ゴルフチャレンジトーナメント』を立ち上げることができました。歴史に支えられながらも、新たな挑戦を始めた一年でした。

2026年度は、業界全体として「つながり」の再設計に貢献する年にしたいと考えています。今後のゴルフ業界を考える上でゴルフ場、練習場、会員権業者、関連団体、自治体が共創のネットワークとして連携することが不可欠と感じています。当社としても、会員サービスの強化や会員権募集の充実に加え、



昨年8月には「住地ゴルフチャレンジトーナメント」を開催（今年は7月に開催）

ジュニア・女性・初心者層へのアプローチ、トーナメントを活用した施策、自治体連携やインバウンド対応、DX推進などを通じて、ゴルフを核としたコミュニティづくりを進めてまいります。

今後の課題は、人口減少やブレイヤー層の高齢化という構造的な問題に真正面から向き合いながら、新しいゴルフファアをどう育て、どう残していくかにあります。業界横断の協力体制を強化し、「ゴルフを進める」という共通目標のもと、持続可能な市場を築いていく必要があります。



泉ヶ丘CCの奥野将徳社長

泉ヶ丘カントリークラブ

「とどまらず、業界全体の未来を見据え、国内外の動向にも積極的に学びながら、視野と視点を広げ続けていきたいと思います」

次に泉ヶ丘CC（大阪府、27H）の奥野将徳社長に話を聞いた。奥野社長は一般社団法人日本ゴルフ場経営者協会の副理事長の他、関西ゴルフ連盟の監事を務めている43歳。

「ゴルフ業界全体としては、コロナ禍以降の来場者数減少傾向が続ぎ、特に20年のコロナ禍による緊急事態宣言などの特別な事情があった年を除けば、おそ

らく統計開始以来初めて、ゴルフ場利用税の非課税者の数が減少に転じたこと、つまりこれまでゴルフ業界を支えてきた団塊の世代のゴルフライアもしくははゴルフ場利用頻度の減少が鮮明になったことが印象に残っています。ただ、このことはもう何年も前から予想されていたことで、当クラブでは数年前から目標達成指数として来場者数を追い過ぎることはせず、顧客満足度や客単価をより重視する方向に舵を切り、来場者数は減少しているものの、売上・利益ともに伸長することが出来ております。

昨年12月に帝国データバンクが『ゴルフ人気回復へ』ゴルフ市場、4年連続増 6年ぶり8000億円台」と題するゴルフ場業界動向調査（24年度）を出しています。正直、実際に業界に身を置く者として、実感とは乖離のあるタイトルではありますが、実際に市場は4年連続で増加している、というデータが示されています。

また、ゴルフ場の経営傾向としても、24年の決算年度において、39・8%のゴルフ場が前年よりも増収、38・1%が増益というデータが示されています。一方で損益動向でいうと24年の決算年度において、24・7%のゴルフ場が赤字となっており、前年よりもその割合は2・9%も増加しています。このデータが示すのは、はっきりとした勝ち組と負け組の二極化であり、確実にゴルフ場来場者数が減少していく中で、客単価の向上（顧客満足度の向上）ができないゴルフ場は淘汰されていくことを明

「ゴルフ場」経営の損益動向



帝国データバンク「ゴルフ場業界動向調査」より引用

確に示していると思います。ご興味ある方は帝国データバンクのウェブサイトに公開されていますので、是非ご一読ください。

なお、個人的には昨年は集大成の年だったように感じていますが、当クラブは1975年に開場し、昨年開場50周年を迎えました。50周年を迎えるにあたり、開場当初の資料を探し出し読み解く作業や、50年の歩みを振り返る作業、チャーターメンバーの皆様へのインタビューなどを通じて、多くの会員や従業員の皆様に支えられ、50年という大きな節目を無事に迎えられたことを改めて実感し、感謝の念を深めることになりました。

そして9月には男子プロトーナメントの『パナソニックオープン』を開催、会員の皆様から多大なる支援を頂き、また全従業員が力を合わせ、素晴らしい大会を開催することができました。これを心から誇りに思っています。これまでのクラブの50年の歩みが、そして私が代表になつてか

ら8年間の歩みが結実した年になったと感じています。

今後の展望や課題についてですが、これまでの集大成となった昨年に対し、今年は未来へ向けて新しいことに挑戦していきたいと考えています。ゴルフ業界の未来を豊かに明るくしていくために、微力ではありますが、私自身もより積極的にゴルフ業界のためにできることを増やしていきたい、同時にともに主体性をもって行動を起こしていく仲間を増やしていくことで、活動の輪を拡げていきたいと考えてい



昨年9月に「パナソニックオープン」を開催

ます。保守的なゴルフ業界において、何かを発信したり、変えていこうとすることは勇気のいることではありますが、危機的な状況だからこそ、行動を起こしていかなければならないと考えています。具体的な活動については、既に計画が動き始めているものもいくつかありますが、発表できるタイミングにありませんので、また改めてどこかでお知らせさせて頂きたいと思っております。

また、ゴルフ場としても、次なる50年へ向けたビジョンづくり、ビジョンを実現するためのミッションの策定、そしてそれに沿った具体的なコース改修・施設改修計画など、こちらも大きな変革の時を迎えています。つい想いが溢れ、先走ってしまいがちになりますが、こうした活動では、メンバーの皆様としっかりコミュニケーションを取り、メンバーのみなさまの想いも込めながら、丁寧に進めていくことが一番重要だと考えています。

最後になりますが、ゴルフという素晴らしいスポーツ・文化を日本社会に根付かせること。

ゴルフに関わる全ての人たちが幸せな人生を送ることができるようになることを。個人的にはそのような目標を掲げながら、より大きな、長期的な視野を持って、活動していきたいと思っています。もしご共感頂ける方がいらつしやいましたら、ともにそういった社会・業界を目指して活動していきたいと思えます。是非お気軽にご連絡下さい。

Kochi黒潮カントリークラブ

次はKochi黒潮CC（高知県、36H）の八木敦士執行役員支配人に話を聞いた。

「当クラブは、昨年は春先から夏までの入場者数減に苦しみました。梅雨明けが6月下旬という事もあり、夏の酷暑が長く続き、各種イベント（割引・お土産付きコンベンなど）開催しても空回りでした。しかし、酷暑時期に我慢していたプレーヤーが涼しくなり始めた10月中旬頃か



Kochi黒潮CCの山本一也社長と八木敦士執行役員支配人（右）

ら多く来場いただき、昨年対比を上回り年間累計でもV字回復しました。コースも酷暑期を扇風機の増設や徹底した水分管理によりなんとか乗り切りました。

そして今年度、特に注力していきたいのは、人材確保やDX化を推進していきたい点と会員サービスの向上（提携クラブ増加や会員のみ受けられるサービスなど）、インバウンドの受け入れ準備（令和9年から高知龍馬空港が国際化するため）の3つが挙げられます。

今後はゴルフ業界においてプレー料金値上げやゴルフ人口減

毎年11月に「カシオワールドオープン」を開催



少などにより、更なる低迷期を迎える可能性が高く、課題は尽きませんが、逆に転換期とも言えるので新たなニーズに応え、対応する準備が必要だと思っています。

最後になりますが、早急に新しい取り組みを行う必要があり、SMART GOLFやLGL (Tech-Powered Golf) などのような、パートナー体験できる施設を建築し、日本での普及活動に補助金を出すなど、新規事業を応援する雰囲気になってほしいと思っています。

大洗ゴルフ倶楽部

大洗ゴルフ倶楽部（茨城県、18H）の新井勝己支配人からの話を紹介し、本特集を終えたい。「昨年9月に『2025ソニー日本女子プロゴルフ選手権』が当倶楽部で開催されました。海外組のスター選手が不参加でありましたが、TV放送開始から各解説者のコース及び整備に対する絶賛の声を頂戴したこと、また競技も地元茨城の金澤志奈選手がプレーオフを制しての初優勝等、女子プロ選手権が無事に終えたことによる知名度の向上が見受けられました。当倶楽部では女子プロ選手権が無事終えたことを先行投資と捉えて、

今後会員権書き換え料や、年会費の適正価格を積極的に検討したいと考えています。

今年注力していくことですが、関東地方内陸部に比べて比較的夏場の気温が低いといわれている海沿いの大洗でも温暖化傾向は避けられず、今後の温暖化に対応すべく暖地型芝草の実験（グリーン）が挙げられます。現在、ニューベント、バミューダ、ゾイシアの3種類を実験中ではありますが、今後数年かけて大洗特有の気候条件に適合するグリーン用の草種を見つけ出したいと思っています。

今後の展望や課題についてですが、プレーヤーの高齢化は当倶楽部も他クラブと同様です。夏場の気温上昇によるプレーヤーの健康を考慮して、乗用カー

トの一部導入のための検討を進めたいと考えています。乗用カーの種類、通路、運用、倉庫等、検討課題は多いですが、倶楽部内の特別委員会にて検討を進める予定です。

また、73年前の倶楽部設立時

からのコンセプトである『環境保全と地域振興』のため、2万5000本にも及ぶ黒松の一層の維持管理、さらに行政との連携を一層深め、ふるさと納税にも積極的に協力していきたいです。その他、毎日曜日に実施している町内近隣の小中学生を対象とした、ジュニアゴルフ教室も一層の力を注いでいく予定です。今後も会員の皆様、地域の皆様が誇れるコース作りを目指してまいります。



大洗GCの新井勝己支配人



昨年9月に開催された「ソニー日本女子プロゴルフ選手権大会」